

「正眼」

安岡 孝

皆様、お元気でしょうか。最近の世界情勢は、皆様同様、私にとりましても困りものです。ウクライナ、ガザ、韓国、アメリカ、これらの状況を見た時、自分ではどうしようもないじれったさを感じ、心を痛めているのは、私のみでしょうか。

そのような昨今ですが、私はすこぶる元気です。昨年(令和六年)、高知大学医学部体育館におきまして、四国医科学生剣道大会が催されました。男女とも死力を尽くしての活躍ぶりは、大変見応えがあり、成長著しい、学生諸君の姿と相俟って、私の脳裏に強く、残っております。

その剣道大会の記念の手ぬぐいに、何か書いてくれないかと、当時の山本キャプテンから依頼がありました。私は下手な字なので汗顔の至りではございましたが、お引き受けしまして、その文字を「正眼」と致しました。剣道の構えの呼び方には、皆様ご存知のように、色々ございます。上段、中段、下段、あるいは、日本剣道形に取り入れられております、陰陽の構え、あるいは、木火土金水になぞらえた、五行の構え、等々です。この中で、一番攻撃と防御に適したものとして、中段の構えが、大抵の人に勧められています。私も、通常は、中段の構えを執っております。

中段の構えは、別の呼び方としては「正眼」とも呼ばれています。この呼び方は、仏教用語の「正法眼」から取り入れられているようです。正しい決まり事の、大事なところというわけです。この「正眼」を正しく執る事が、剣道の始まりなのです。握り方、足捌き、眼の付け方、剣先の向き、乗る、ためる、間合、機会など、その他にも多くの心掛けておくべきことが、中段あるいは正眼の構えを執る場合にあるのです。

剣道には、目に見える技の面と目に見えない心の働きの一つになったところにその妙味が表現されます。剣道を修行する上において、心すべき言葉の一つとして「剣道は打ち合いではない。攻め合いである。」と言うのがあります。剣道は、ただ打つだけでは無駄打ちになってしまう。当たったとしても、たまたま当たったと言うものではない。という訳です。

剣道は、心を攻め、打つ機会だと思った時には、思い切った技が出ている。というのが本当の技です。私は、とてもそこまで、辿り着くことはできませんが、その辿り着くためには「正眼」の構えを正しく執ることが必要であると、考えています。

令和七年 乙巳(きのとみ)正月